

石原 俊：近代日本と小笠原諸島——移動民の島々と帝国。平凡社。2007年、533p.、5,000円。

社会学の書物ではあるが、地理学のフィールドワーク論としても模範となる刺激的な内容なので、詳細に紹介してみたい。著者石原 俊は地域・歴史・法社会学を専門とし、本書は京都大学に提出した学位論文を骨子とする。

本書の構成は次の10章からなっている。

第1章 移動民の占領経験——「カナカ系の人、ケテさん」のライフヒストリーから、第2章 移動民の島々と帝国——本書の理論的視座、第3章 移動民の島々の生成と発展——小笠原諸島をめぐる実践・法・暴力（1826-1860年代）、第4章 水兵たちと島人たち、あるいは法と暴力の系譜学——沖縄島におけるペリー艦隊の衝撃を焦点に（1853-1854）、第5章 移動民と文明国のはざまから——ジョン万次郎と船乗りの島々（1841-1864）、第6章 海賊から帝国へ——占領への道程（1869-1886）、第7章 主権的な法と越境する生——「帰化人」をめぐる自律的な交通（1877-1920年代）、第8章 自由の帝国の臨界——小笠原諸島と「南洋」の系譜学（1853-1910）、第9章 生き延びるためのたたかい——「帰化人」をめぐる動員とテロル（1877-1945）、第10章 終わらない占領経験——小笠原諸島の〈戦後〉をめぐる（1945-）。

一般の書物と異なり、本書の構成で、第1章にいきなり占領経験談が紹介され、第2章で理論的視座が書かれている。逆ではないかと思った。しかし、そこには著者の次のような考えがあった。「この島々の近代経験を考える際、なぜ移動民の生と市場・国家・法などの関係、とりわけ移動民と国家の「緊張」関係に照準すべきなのかという問題を、語りという具体的な素材の検討を通して内在的に浮かび上がらせる作業が必要だと考える」。

語りと対話にインパクトがあるのは具体性を有しているからである。「あなたは金貨、私はお札」とは民俗学者瀬川清子が1931年にケテさんを評した言葉である。著者はこうした対話、語りを随所に引用しつつ、日本国家と辺境の島との力関係を読み解いていくのである。

著者は「理論的な問題に関心の無い読者は、第1章を読んだ後、第2章を飛ばして……」と控えめに言うが、ぜひ第2章を精読して欲しい。難解な諸業績を如何に自分の論文に取り入れていくかというヒントが隠されているからである。

第3章から具体的な入植者たちの話になっていく。一体誰が最初に小笠原諸島に来たのであろうか。1830年にハワイ諸島などからの移民団が、家畜や種子などを携えて小笠原諸島の父島に上陸し、入植を開始した。以後、イギリス、ロシア、スペインなどの船が立ち寄っている。その多くは商船や捕鯨船である。当時鎖国であった日本の直ぐ南の海に世界中の船が頻りに航海していたことに驚かされる。近年日本に対して捕鯨規制が強く働き掛けられているが、捕鯨していたのはあなた達だと逆襲したくなる。

最初に入植した人々は一体何を食べていたのであろうか。あるいは、入植者ほか逃亡者、漂流民、略奪者などさまざまな後続移住者が島に入ってくる。前住者との抗争があったはずである。いかに対処されていったのであろうか。こうした問に第3章は次々と具体的に解答を出してくれる。著者は彼らを称して「船上や島々のローカルな法の間をわたりあるきながら、移動民として生き抜いていたのである」と力強さを前面に出し肯定的にとらえている。ところが評者には移動民の大半は「生き抜いて」ではなく「生き血を抜かれ続け」ととらえざるを得ないように感じられた。

第4章、ペリーといえば、あのペリーである。1853年に黒船で日本に来航した。浦賀に来て開港をせまったことくらい知識しかなかったが、沖縄にも来ていた。アメリカの世界標準を持ち込もうとしたペリー、そうさせまいとする琉球王府、両者に翻弄されつつもしたたかに対応する住民、この3者のからみが興味深い。

第5章、いよいよ、ジョン万次郎の登場か。とはいうものの、評者は、恥ずかしながら、ジョン万次郎について、名前しか知らない。おおよそ歴史上の人物について、そのライフコースをおぼろげながら語れるのは100人に1人くらいしかいない。ジョン万次郎は語れない99人の方に入る。本書に触れて、彼がアメリカの東海岸で3年間勉強したこと、捕鯨

船員であったことを初めて知った。本章は、小笠原諸島における万次郎を焦点として、彼の実践とそれをめぐる歴史的・社会的状況を描き出しながら、海と島々に生きる移動民の生と日本という文明国＝帝国の特異な関係をとらえるための新視点を拓くことに成功している。

第6章、この章では海賊が主役である。そしてベンジャミン・ピーズが鍵であり、外国人から帰化人への道程が示される。ピーズはかなりの海賊である。毒を盛った相手は歯を失った。ピーズはかなりの悪党である。奴隷、召使い、女の交易や調達にたずさわった。「ピーズをめぐる諸実践において、経済活動は騙し奪い取る暴力と連続した位相で展開していたのである」(p. 225)。しかしながら、小笠原を開発していったのも彼である。ローカルな法体系の中ではあるが、彼の土地である。ゆえに明治政府は手を焼くのであるが、その間のやりとりが詳細に述べられている。

第7章、この章では交通が「帰化人」にいかなる影響を与えているかが議論される。いいかえると、日本帝国による小笠原諸島の占領が進展していく過程で、「外国人」、「帰化人」が、従来から培ってきた自律的な社会的・経済的实践をどのように組み替えていったのかが議論される。また、日本帝国の力が強くなれば外国人、帰化人は居心地が悪くなるであろう。彼らが培ってきた自律的な交通のあり方がどのように切り縮められていったのかが考察される。

第8章は、前章までで語られてきた小笠原諸島、一部沖縄島の移住民の動向とその研究意義を、より大きな枠組で位置づける試みである。日本帝国の「南進論」という枠組で、その結論として、私には意外であったが、次のようにまとめられている。「世紀転換期の『南洋』開発にかかわる言説や実践において最も重視されていたのは「自由貿易」を基調とする殖民や交易の拡大であり、小笠原・硫黄島諸島より南への日本帝国の領土的拡張は副次的な課題にすぎなかったのである」(p. 320)。日本帝国の南洋進出、領土拡張は副次的であったのか。

第9章、そうか、この本はケテさんの語りから始まったのだ、と思ひ出させる章である。

冒頭に、「1931年、父島を訪れた瀬川清子に『南方のカナカ系の人、ケテさん』が語った次の言葉を、ここでもう一度引用しよう」とある。著者がこの語りを2度も引用しているということは、それが本書

の最重要文であることに間違いない。小笠原諸島が本格的な空襲を受けた1944年から13年も前に、ケテさんにとって島が戦場になるという想像は、「異人」と名指されて自分がテロルの標的になる状況や、「日本人」と名指されて自分の夫や子どもたちがテロルに遭う状況を、ただちに予感させた。そのことに素直に感じ深く解釈する中で、著者は本書の構想を思いついたのだと推察する。

第10章では、本書の最後として、日本帝国の降伏後の小笠原諸島がアメリカ合衆国の施政権下に置かれ、その後日本国に編入されていく過程で、かつて「帰化人」と呼ばれた人びとが主権的な力に翻弄されながらどのように生き抜いていったのかが述べられている。

この本の体裁上の特色は、本文中に、簡単な人口推移の表を除いて、図表が1枚も無いことである。図表に満ちあふれた地理の書物を見慣れている評者にとって、奇異な感じがしつつも新鮮であった。それでいて情景が目につかぶので、それは著者の筆力が優れているからであろう。私自身も含めてであるが、地理学専攻生も図表なし論文に挑戦してみたいかがであろうか。発表する際も、パワーポイントなし、レジュメなし、語りのみで勝負というのも歓迎したい。

思いが少し横にそれたが、図表が本文中に1枚も無いがゆえに、各章タイトルページの裏面にのせられている写真、記事が印象深い。第10章は「村になった小笠原」(毎日新聞 1968. 7. 16)。虫メガネでこの記事を読んでみた。異性、結婚相手を求めるのは同じでも、男女の反応がまるで違っていた。「青年たちが割切った気持ちで日本復帰を喜んで、日本語の勉強にも身を入れているのに対し、女の子の心は微妙に揺れ動いている。島にいたネービーとの別離は、キスとホオずり、アメリカ映画でも見ているようだった」……「日本復帰がそれほどうれしいとは思わないのに、返還前後には笑顔を強要され、日の丸の旗を持って芝生を走らされた」なかなか興味深い記事であった。

いつ生まれたか、幼いときにいかなる環境に育ったか、これは「ライフコース」研究にとっても、評者の「地域環境史」研究にとってもかなり重要な思考事項であると思った。そこに男性と女性の違いが加わる。ステイツに恋いこがれる女ごころ、わからないでもない。

『近代日本と小笠原諸島』、真剣に読んだら真剣な  
答えが返ってきた。そんな書物であった。

(溝口常俊)

宮川泰夫・山下 潤編：日本・アジアにおける地  
域の構造と開発。古今書院，2007年，120p.，2,800  
円。

評者は、一般教育科目「自然と人間の地理学」を  
長らく担当している。この授業の最初の講義では、  
いつも飯塚浩二編著『世界と日本』（大修館，1955  
年）に書かれた序文「何のために人文地理学を学ぶ  
か」を学生たちに紹介する。飯塚は、この中で、  
「現代のわれわれの生活には、もはや他から孤立し  
て、自分の殻に閉じこもっていられるような場所は、  
どこにもない。しかも、近くのアジアの情勢を見ても、  
この島国への国際情勢の反映のしかたを見ても、  
戦後の世界が新しい均衡を求めて大きく動揺しつつ  
あることは、だれの眼にも明らかである。われわれ  
にとって、そしてたとえどんな片田舎に住む人々に  
とって、日本全体、世界全体について、正しく体  
系づけられた地理的な知識を、そしてその上に成り  
立つ正しい国際理解を持つことが、今日ほどたいせ  
つな時代はない」と述べている。当時、日本は戦後  
の復興を果たし、高度経済成長への一歩を踏み出  
したときである。亢進するグローバル化の波に翻弄さ  
れる今の時代にも、そのまま当てはまるといえよう。

本書は、当時から半世紀を経た、日本を含むア  
ジア地域の構造変化とそれを踏まえた地域問題・開発  
について、九州大学で地理学関連の研究教育に携わ  
った教員やアジア地域に造詣の深い研究者らによ  
って執筆されたものである。近年、九州はアジア地  
域へのゲートウェイとしての性格を強めつつあり、福  
岡は歴史的にも、アジアとの交流・交易拠点として  
の役割を果たしてきた。それだけに九州大学には編  
者らをはじめ、アジア地域の研究・学術交流を指向  
する研究者も多い。こうしたことから、本書の執筆  
陣も多彩であり、内容も多様である。

本書は、本編14章から構成され、見開き右ペ  
ージには執筆者らが厳選・工夫した図・表や思いを込  
めて作成された主題図、それに地形図、写真、衛星  
画像などが数多く掲載されていて、書名の前に「図  
説」と付けても良いくらいである。紙数が限定され  
た分、各章とも大変充実した内容となっている。章

構成は、以下の通りである。

第1章 国土の形成と地域の構造、第2章 農村  
と社会開発、第3章 水産業の産地形成と振興計画、  
第4章 工業の空間変動と工業配置の計画、第5章  
都市社会問題と都市計画、第6章 韓国の地域産業  
計画と産業構造の変化、第7章 政治構造と政治空  
間、第8章 観光資源と観光振興計画、第9章 自然  
災害と防災計画、第10章 自然環境と環境保全  
——トルコの大地から、第11章 地球環境問題と  
環境計画、第12章 地域の生態と文化、第13章  
地方財政と地方行政：市町村を中心として、第14  
章 広島県におけるNPO団体による外国人支援活  
動——広島県のNPO団体を事例として。

まず第1章では、国家の領域と離島問題、国土の  
計画と国水の計画、首都の奠都と道州制の意義など  
について、筆者の言を借りれば「計画と構造の相克  
を超えた相生に留意し」、九州、アジアを視野に今  
後の国土計画の問題点を指摘している。九州では、  
突出して地元政財界を中心に「九州道州制」論議が  
一人歩きしているが、「自律的道州の収斂を図ること  
なくしては、国家の混乱、国土の荒廃を招きかね  
ない」と指摘する。第2章では、東アジア成長の共  
通点として、小農経営が工業化に重要な役割を果た  
したことを前提に、東アジア農業・農村の理解には、  
村請け制の下で培われた特殊な社会条件など、日本  
が歩んだ歴史的條件に目を向ける必要性を指摘する。  
さらに韓国農村開発の構造的課題とセマウル運動、  
および中国農村企業と日本の近世村請け制、村の類  
似性について論述している。第3章では、日本・台  
湾・中国で展開されているウナギ養殖・加工業を例  
に、水産業の立地移動と産地存続の方策が論じられ  
ている。ウナギのフードシステムの構造的変動を踏  
まえ、丹念な現地調査をもとにした国内産地の生き  
残り戦略は興味深い。第4章では、九州における半  
導体関連産業の立地変動を事例に、地域と工業配置  
計画との関連を述べている。九州ではIT関連産業  
の配置計画と地域計画に関する諸計画が推進されて  
いるものの、実態は工業主体、企業合理性を優先し  
たもので、工業と地域間バランスを考慮した計画に  
なっていないと批判する。ここで工業地理学は、も  
っと工業配置計画と地域計画との関わりを論究し、  
より積極的に計画論の発展に寄与すべきとの、厳し  
い指摘もなされている。第5章は、歴史的背景を異  
にする5市が対等合併した北九州地域を取り上げ、